

トルコにおける新教育課程での地理教育の動向

社会科教育講座（社会科教育） 西脇 保幸

Turkey's Geographic Education in the New Curriculum

Yasuyuki Nishiwaki

1. はじめに

筆者は拙稿(1996)や拙稿(1997)で、トルコにおける1990年代前半までの地理教育の動向を分析したが、その後同国では1997年の教育改革で小・中一貫の8年制初等教育学校が導入された。初等教育学校における教科「社会科 (Sosyal Bilgiler)」で地理学習が行われており、拙稿(1999a)で初等教育学校における地理教育の状況についても言及した。初等教育学校修了後の教育機関である高等学校における地理学習については、拙稿(1997)で従前の教育課程に繋がる状況も紹介しているが、2005年以降は、高校の修学年限が3ないし4年であったものがすべて4年となった¹⁾。それに伴い教育計画も改訂され、高校の教科「地理 (Coğrafya)」については、「2005年地理科教育計画 (Coğrafya Dersi Öğretim Program• (2005 Program•))」が策定された。また、拙稿(2006)で報告されているように、「社会科」教育の刷新が図られて、「2004年社会科教育計画」も策定された。この新たな教育課程では、子どもの学習活動が中心となり、知識・理解と能力のバランスを図り、社会に積極的にかかわる能力を育もうとしている。知識・理解によるアイデンティティの育成を目指した従前の「社会科」教育とは、異なる動向が見られる。こうした高校の修学年限の延長に伴う新たな教育課程による地理学習と、初等教育学校における「社会科」教育の刷新を踏まえて、本稿では新教育課程による地理教育の動向を分析し、あわせて付随する課題も考察することにした。

2. 教育課程の編成と地理教育

2-1 初等教育学校における教育課程と地理教育

トルコの教育体系は、大きく就学前教育、初等教育、中等教育、高等教育から構成されている。6歳からの初等教育は義務教育であり、無償となっている。初等教育の実施機関が8年制の初等教育学校である。就学率は2006/07年度で96.4%と、高い比率が実現されている。

初等教育学校の教科は、必修教科と選択教科からなり、各学年とも週30時間で構成されている。2005年12月告示の教育課程からは必修教科として、「トルコ語」「数学」「生活科 (Hayat Bilgisi)」「理科と技術」「社会科」「トルコ共和国の革命史とアタテュルク主義 (T.C.İnkılap ve Atatürkçülük)」「外国語」「宗教文化と道徳」「美術」「音楽」「体育」「技術と構想」「交通と応急手当」「ガイダンス/社会活動」が当てられている。選択教科には「外国語」「芸術活動」「スポーツ活動」「コンピュータ」等があるが、4年生と5年生で週4時間が配当されているものの、他の学年はすべて2時間である。

初等教育学校における地理教育は、後述のように、主として「社会科」を通じて実践されるが、1年生から3年生まで各学年週5時間が割り当てられている「生活科」でも行われる。「生活科」は、各学年とも大単元「学校の私の楽しみ」「かけがえのない私の家庭」「昨日、今日、明日」から構成されているが、それぞれの単元にみられる地理学習の項目は、以下の通りである。

1年生では「かけがえのない私の家庭」の単元で、家庭で用いられる資源の重要性を明らかにすることや、家族とともに自然災害に備えること、「昨日、今日、明日」の単元で、モデルを使って地球の自転を観察し、その結果昼と夜がみられることに気付くことや、自然災害が環境をどのように変えたかを調べるこ

と、人間が環境をどのようにして変えたかを調べて説明すること、といった学習が該当する。2年生では、「学校の私の楽しみ」の単元で、登下校の際にみられる交通の手段を観察し分類すること、「かけがえのない私の家庭」の単元で、日の出と日の入りを観察して方位を定め、家の各部分を方位や位置関係（左右前後など）で言えることや、トルコで発生している自然災害の事例を持ち出せ、自然災害は自然と人間の影響であることを把握し、それを守る手段を発見すること、「昨日、今日、明日」の単元で、地球の公転の結果、季節が生じることに気付くことや、カレンダーを使って気象の変化を毎日や週ごとに観察し、その結果をグラフで示したり解説したりすること、大気・水・土壌は季節によって変化することを観察すること、過去から今日まで建物がどのように変化してきたかを調べて説明すること、自然災害に対して他国でとられている対策を調べ、トルコでのそれと比較すること、自然の環境と人工の環境の共通性と差異を説明すること、などの学習が該当する。3年生では、「学校の私の楽しみ」の単元で、学校や教室の略図を描くこと、「かけがえのない私の家庭」の単元で、住所の知識を持つことの重要性を明らかにすること、家の位置を四方位で記述すること、方位がわかる様々な手段に関心を持ち調べること、地図や地球儀上で水体と陸地の区別をすること、「昨日、今日、明日」の単元で、諸外国の国旗を調べてトルコの国旗との差異や共通性を明らかにすること、個人と社会や自然環境との間における相互依存関係を把握して、それを示す例をあげること、水の循環について疑問を持ちわかったことを持ち出すこと、カレンダーを使って気象の日・週・月の変化を観察して、観察結果をグラフで示し気象情報と比較すること、様々な気象条件が交通にあたる影響を説明すること、地球の運動の結果生じる変化と持続や、季節ごとに観察される変化と持続を認識すること、自然災害から守る手段を考えること、自分たちの生活する環境をより清潔なものとするための計画を立てること、といった学習が該当する。

「社会科」は、4年生から7年生まで各学年とも週3時間の履修となっている。4年生の単元は、以下にみるように合計8つの単元から構成されている。「自分自身をよくわかっている」の単元では、家族の一員や国民としての自己を確認させるとともに、個人によって感情や考え方が異なることなどを学ぶ。「自分の過去を学んでいる」の単元では、共和国成立に至る祖国解放戦争に関する歴史学習が中心となっている。「私たちの暮らす場所」の単元は、地図と国土の自然環境についての学習である。「生産から消費まで」の単元では、食料の生産過程とその進歩や消費者として必要な知識などについて学習する。「幸いにもある」の単元は、主として科学技術の発展についての学習である。「みんな一緒に」の単元は、社会生活を営むための社会組織に関する学習が中心である。「人々と運営」の単元では、自治と国会についての学習がなされる。「遠くの友達たち」の単元は、数カ国の子どもの生活を通じた国際理解の学習である。

5年生の単元も以下にみるように、合計8単元から構成されている。「自分の権利を学んでいる」の単元は、タイトル通り権利についての学習であるが、協力や責任といった概念もあわせて学ぶことは言うまでもない。「だんだんにトルコ」の単元は、世界遺産や特産品などを通じた国土学習とトルコ革命史の学習から構成されている。「わたしたちの地方をよく知りましょう」の単元では、子どもの生活する地方についての地域学習である²⁾。「わたしたちの生産」の単元は、トルコの主要な産業についての学習である。「実現する夢」の単元では、科学技術の進歩について学習する。「社会のために働く人たち」の単元では、医療・文化財保護・環境保全などに貢献する人や組織について学ぶ。「1つの国家1つの国旗」の単元では、法律と民主主義体制についての学習からなっている。「わたしたちみんなの世界」の単元は、トルコに深い関係の深い国数カ国を事例とした外国地誌学習で、国際理解に目標が置かれている。

6年生では、まずはじめに「社会科を学んでいる」の単元で、社会科を通じて学ぶ社会科学的な視点や追究の過程、公民としての自覚などを確認している。「地表での生活」の単元は、気候と様々な生活やアナトリアの古代史などの学習からなる。「わたしたちの国の資源」の単元では、国土の資源を通じての経済学習が中心である。「わたしたちの国と世界」の単元では、世界の産業・経済やトルコと世界の結びつきを中心とした学習が行われる。「シルクロードのトルコ民族」の単元は、初期トルコ民族国家の成立からアナトリアへの移動までの歴史やイスラム教の誕生と普及についての学習である。「民主主義の冒険」の単元では、

タイトル通り、民主主義や権利・平等について学習する。「エレクトロニクス世紀」の単元では、科学技術の進歩と知識の重要性などを学ぶ。

7年生では、「コミュニケーションと人間関係」の単元で、コミュニケーションの人間関係に果たす役割の重要性などについて学習する。「わたしたちの国の人口」の単元では、トルコの人口分布や居住と移動の自由について学ぶ。「トルコ史の旅」の単元は、セルジューク朝とオスマン朝についての通史学習である。「時代の中の科学」の単元は、まさに科学史についての学習である。「経済的社会的な生活」の単元では、生産技術の発展が社会経済的な生活に与えた影響などについて学習するとともに、職業選択の計画を立てる。「生きている民主主義」の単元では、立法、社会組織、社会活動などでみられる民主主義を中心に学習する。「国家間の架け橋」の単元では、主にグローバル問題の解決や人類の遺産としての思想・芸術・文学について学習する。

したがって、「社会科」で行われている地理教育は、4年生の地図と国土の自然環境についての学習や国際理解の学習、5年生の世界遺産や特産品などを通じた国土学習や子どもの生活する地方についての地域学習、国内の産業学習、国際理解のための外国地誌学習、6年生の気候と様々な生活や国土の資源についての学習と、世界の産業・経済やトルコと世界の結びつきについての学習、7年生のトルコの人口分布や居住に関する学習などからなっていると、判断できる。詳細な分析は次章で言及することにしたい。

2-2 高校における教育課程と地理教育

トルコでは日本の中学校が初等教育の範疇に入るので、中等学校は日本の高校のみに相当するが、中等学校はすべて4年制である。初等教育学校を卒業して中等学校に進学するにあたり、選抜配分試験（トルコ語の略称でOKS）を受験しなければならない。中等学校への進学率は向上して、86.64%（2006/07年度）にまでなっている。中等学校は普通教育系と職業・技術教育系に大別され、普通教育系としては、普通高校、アナトリア高校、自然科学高校、アナトリア教員高校、アナトリア芸術高校、社会科学高校、スポーツ高校がある。

高校におけるカリキュラムや1週間の授業時数は、高校の種類によって異なる。例えば普通高校は週30時間であるが、外国語学習に力点を置くアナトリア高校では35時間となっている。カリキュラムもそれぞれの高校の種類を反映したものとなっているが、必修教科と選択教科に大別される。どの種類の高校でも共通して生徒が履修する必修教科には、「言語と表現」「トルコ文学」「宗教文化と道徳」「歴史」「地理」「トルコ共和国の革命史とアタテュルク主義」「哲学」「交通と応急手当」「体育」「保健」「ガイダンス」「数学」「幾何学」「物理」「化学」「生物」「外国語」「国民の安全」などがあるが、校内に専門コースが設定されている普通高校やアナトリア高校では、そうした専門コースによっても必修教科の位置づけが異なる。ちなみに、普通高校とアナトリア高校で設定されている専門コースは、自然科学系、社会科学系、トルコ語・数学系、外国語系である。

このように、トルコの高校では地理学習が必修となっているが、実際のカリキュラムにおける「地理」の位置づけは、高校の種類や専門コースによって異なっている。普通高校やアナトリア高校の自然科学系や外国語系では、日本の高校1年生に相当する9年生と日本の高校2年生に相当する10年生で、それぞれ週2時間の必修履修となっているほか、2時間の選択履修もできるようになっているが、社会科学系では9年生での2時間と、10年生から12年生までの各学年でそれぞれ4時間が必修履修となっている。トルコ語・数学系では、9年生で2時間、10年生で4時間、11年生と12年生でそれぞれ2時間が必修履修である。自然科学高校では9年生で週2時間の必修履修となっているほか、2時間の選択履修もできる。スポーツ高校やアナトリア芸術高校でも9年生と10年生でそれぞれ2時間の必修履修のほか、2時間の選択履修もできるようになっている。

上述のように、カリキュラムにおける「地理」の位置づけは高校の種類や専門コースによって異なるが、注目できるのは、その位置づけが「歴史」とほぼ同じ扱いであるということである。むしろ校種や専門コ

ースによっては、「地理」の方が重視されている事例も散見する。普通高校やアナトリア高校のトルコ語・数学系では、「歴史」が「地理」ほど時間数が割り当てられておらず、「歴史」は9年生と10年生でそれぞれ週2時間の必修と2時間の選択履修になっているにすぎない。日本で地理歴史科において世界史が必修となっているなど、事実上歴史学習が優先されているのとは、対照的である。もっとも、共和国成立以降の歴史については「トルコ共和国の革命史とアタテュルク主義」で学習することになっているので、実質的な歴史学習への割り当て時間は、地理学習へのそれよりも元来多いと考えられる。また後述のように、「地理」の学習内容については日本の地学に相当する学習内容を含んでおり、トルコにおける地理教育と歴史教育の対等性を単純には論じきれない面がある。

3. 新教育課程における地理教育の動向

3-1 初等教育学校の教科「社会科」における地理教育の動向

4年生の「社会科」における地理学習は、「私たちの暮らす場所」と「遠くの友達たち」の2つの単元で行われる。前者の単元では、方位を見出すこと、観察したことを絵や略図で説明すること、それらの図に使われる記号を説明すること、身近な地域の場所の略地図を描くこと、気象を観察してわかったことを図入りのグラフにすること、周辺で見られる自然的要素と人文的要素を区別すること、伝説・物語・詩などを利用して暮らしている場所の地理的特色に関して見出すこと、自然災害に対して準備することが、それぞれ学習の目標となっている。空間認識や地図活用の基本を習得し、気象観察などを通じて国土の自然環境の理解を図るとともに自然災害に対する認識を深めることなどの学習が中心となっている。後者の単元では、世界には様々な国があることに気付くこと、視覚教材を利用し様々な社会の日常生活に関して見出すこと、他の社会の同世代の子どもの日常生活と比較すること、共通してみられる祝祭日を例示することが、それぞれ学習の目標となっており、異文化理解による国際理解教育的な内容となっている。ちなみに教科書で具体的に記述されている国は、第一次世界大戦に参戦したオーストラリア、トルコから持ち込まれたチューリップの世界的産地オランダ、トルコ系民族のトルクメニスタン、トルコ軍が朝鮮戦争で出動した韓国、オスマン帝国の版図にあったチュニジアの5か国である。こうしてみると、従前の4年生の教育課程で、身近な地域や所属する県や地方の地域理解が主な学習内容であったこととは、大きく異なっていることがわかる。

5年生の「社会科」における地理学習は、「だんだんにトルコ」「わたしたちの地方をよく知りましょう」「わたしたちの生産」「わたしたちみんなの世界」の4単元で見られ、5年生は「社会科」の中でもっとも地理学習の内容の多い学年となっている。「だんだんにトルコ」の単元では、トルコ革命史の学習も行われるが、地理学習としては、身近な地域や国内各地の自然の豊かさや史跡・歴史的建造物を認識すること、国内各地の文化的特色を例示し、それらと身近な地域の文化的特色とを共通性や差異の観点で比較すること、文化的諸要素が人間の生活において持つ重要性を明らかにすることが、それぞれ学習の目標となっている。世界遺産や特産品などを通じ自然と文化の豊かさから国土を認識させる学習単元と考えられる。「わたしたちの地方をよく知りましょう」の単元では、トルコの立体地図上で子どもの生活する地方の地勢を認識し、その地方で見られる気候、その人間の活動への影響、日常生活を例示し説明すること、その地方で人間の生活する場と地理的特色を関連づけ、その地方で人間が自然環境を変えたり利用したりする様子を論拠をもって示すこと、その地方で見られる災害とその地方の地理的特色を関連づけること、自然災害の社会生活への影響を例示すること、その地方で見られる自然災害の原因についても気付くことが、それぞれ学習の目標となっている。子どもが生活する地方の地域的特色を理解させるだけでなく、その地方を通じて地人関係を考察させる学習が展開されている。ちなみに教科書では具体的な地方の例として、首都アンカラの所属する内アナトリア地方が記述されている。「わたしたちの生産」の単元では、子どもの生活する地方の経済的活動に気付き、経済的活動と地理的特色とを関連づけること、その地方の経済的活動の全国での地位を評価すること、経済における人間の影響力に気付くこと、生産への賛助というテーマで見

解を構成すること、協力して生産に繋がる新たな考えを展開することが、それぞれ学習の目標となっており、子どもの生活する地方を中心に産業経済活動を理解させるとともに、生産活動への子どもの積極的な関与が期待されている。「わたしたちみんなの世界」の単元では、世界の子どもたちには共通の側面や関心領域があることに気付くこと、国家間の通商に気付くこと、そうした経済関係における情報や交通の技術の効果を議論すること、様々な国で共通する遺産の諸要素を例示し、そうした遺産を認識するうえでの観光の重要性に気付くこと、観光の国際関係における重要性というテーマで視点を発展させることが、それぞれ学習の目標となっており、国際理解を経済的結びつきの視点で展開する内容となっている。具体的には外国地誌を題材に学習が進められ、教科書では以下の5か国が記載されている。すなわち、トルコ人の在住者が多いドイツ、スエズ運河を有するエジプト、エルトゥールル号の遭難で救助した日本³⁾、熱帯雨林を抱えるブラジル、綿花の生産が多いトルコ系の国ウズベキスタンである。このように、5年生の地理学習は、自然と文化の豊かさや産業経済活動からの国土認識と子どもの住む地方の認識、自然災害などを例にした地人相関論的な考察、経済的結びつきからの国際理解に整理できるが、従前の教育課程では主に自然環境からの国土理解だけであり、新しい教育課程では5年生で地理学習に力点が置かれていることがわかる。

6年生の「社会科」における地理学習は、「地表での生活」「わたしたちの国の資源」「わたしたちの国と世界」の3単元で見られる。「地表での生活」の単元の後半はアナトリアの古代史についての学習内容であるが、前半は地理学習となっている。すなわち、異なる縮尺の地図を用いて大陸や大洋、トルコの地理的位置を認識すること、とりわけトルコの世界における位置の重要性を把握できること、世界の異なる自然環境下の暮らしから気候の特色を見出すこと、地図や視覚教材を用い、トルコで見られる気候型の分布において位置や地形の役割を明らかにすることが、それぞれ学習の目標となっている。さらに、事例研究を通じて、有史以前から今日まで定住に影響を及ぼす要因について見出す学習も行われるが、それが古代史の学習に繋がっている。総じて環境決定論的な地理学習であるが、人類史の観点からは自然環境の持つ重要性は言うまでもないとおりで、地理学習から歴史学習へうまく繋げている。「わたしたちの国の資源」の単元では、資源と経済活動を関連づけてその国民経済での地位や重要性を評価すること、トルコの地理的特色を考慮して投資やマーケティング計画を提案すること、公民の責任や国民経済への参加の観点から納税の必要性や重要性を弁護すること、経済の発展を支援する機構や組織を認識すること、天然資源の無自覚な消費が人間の生活にもたらす影響を議論すること、質の高い人的パワーがトルコ経済の発展で果たす役割を評価すること、関心のありそうな職業に必要とされる修練、能力、個人的特性を追究することが、それぞれ学習の目標となっており、単元の後半は経済学習に力点が置かれている。しかし、そうした経済学習のいわば前提にもなる国内資源の現状と開発についての理解は、資源からの国土認識でもあり、地理学習の重要な側面である。資源開発の例として、国をあげての大規模開発である南東アナトリア開発計画（GAP）を学習するが⁴⁾、単に国威発揚的な意味だけでなく、トルコの地理的特色を考察させるうえでも意義のある題材だと判断できる。「わたしたちの国と世界」の単元では、視覚教材やデータを用いて世界における人口と経済活動の分布の理由について見出すこと、トルコと諸外国との経済関係を資源や必需品の視点で評価すること、トルコ系諸国や近隣諸国との文化的・社会的・政治的・経済的諸関係をアタテュルクの外交の考え方から評価すること、トルコが諸外国と自然災害や環境問題で結束して協力することの重要性に気付くこと、国際的な文化・芸術・見本市・スポーツ活動が社会間の相互作用で果たす役割を評価することが、それぞれ学習の目標となっており、人口と経済から世界全体の概況を把握することや、国際関係の視点からの国際理解が主なねらいとなっている。従前の6年生の教育課程で地球上におけるトルコの位置を確認してから、産業学習を中心とした国土認識の地理学習が行われていたのと比較すると、新しい教育課程では、国土認識の学習については従前のものと重なるが、さらに国際理解的な内容が追加されていることがわかる。

7年生の地理学習は、単元「わたしたちの国の人口」で行われる。この単元では、視覚教材やデータを

用いてトルコの人口分布の要因と帰結について議論すること、図表を用いてトルコの人口に関連するデータを解説すること、教育や労働の権利施行と国家や公民のそれに対する責任を関連づけること、事例研究を通じて人口移動の要因と帰結について議論すること、居住と移動の自由を説明することが、それぞれ学習の目標となっている。この単元では、教育や労働の権利、居住と移動の自由といった憲法学習の内容も含まれているが、主にトルコの人口についての学習から構成されている。従前の7年生の教育課程では、トルコ国内の諸地方のほか、トルコの隣国と中央アジアのトルコ系諸民族の国家・地域、トルコ系住民が少数民族として居住する国々についての知識・理解が地理学習の目標であったが、それに比べると新しい教育計画では、地理的な内容は大幅に削減されている。

従前の教育課程では、歴史学習とともに「社会科」の主要構成部分をなしていた地理学習の目標は、4年生の身近な地域や子どもが所属する地方の理解から、5年生での自然環境の視点からと6年生での産業の視点からの国土理解に拡充されたうえで、7年生で隣国やトルコ民族の世界といった外国理解にまで及ぶようになっていた。確かに外国地誌学習が行われていたが、それは国土に隣接する外国やトルコと同系民族の国家や地域であり、国土理解と同様、国土認識を深化させる手段であった。その意味では、従前の地理教育は、地域理解を通じた国土認識によってトルコ人としてのアイデンティティの育成に主眼を置いていた。

しかし、前述の学習内容の概説からも明らかなように、初等教育学校の新教育課程では「社会科」教育刷新の動向が反映された地理教育となっている。確かに新たな教育課程においても国土認識の育成が目標となっているが、国内の7地方すべてを網羅的に取り上げて国土理解を図っているわけではない。むしろ新たな教育課程では、単に知識・理解だけではなく、地図や視覚資料などのデータを活用させたり、環境問題などの社会的な課題に気付かせ、それをどのように解決していくべきなのかを考えさせるなど、子どもを学習の主体として、必要な知識を得るために不可欠な能力を子どもに獲得させ、得られた知識を意味づけさらに追究させることを保証している。すなわち、方法知の学習にも大きく力点が置かれおり、そこで獲得された能力で社会変革や新たな社会を創造することができることを想定し、知識と能力のバランスを図りながら社会に積極的にかかわる能力を育もうとする「社会科」教育の考え方が、地理学習にも反映されている。したがって、学習内容としてもアイデンティティの育成を目指した地域理解よりも、地域を通じた見方や考え方の育成に重点が置かれており、地域は事例として扱われている。そのために、従前の教育課程のような同心円拡大による社会認識が、明示されているわけではない。

3-2 高校の教科「地理」における地理教育の動向

前述のように高校の「地理」は必修教科となっており、一般に9年生と10年生でそれぞれ週2時間が割り当てられている。それに対して11年生と12年生での学習は選択履修であり、必ずしもすべての11年生や12年生が「地理」を学習しているわけではない。「地理」の学習はどの学年とも、「自然のシステム」「人文のシステム」「場所に見る自然と人文の統合：トルコ」「地球環境：諸地域と諸国」「環境と社会」の5領域から構成されているので、高校の「地理」学習は、5つのテーマについて学年進行とともに学習内容を深化させていく方式が採用されている。したがって、学年進行とともに学習内容の領域を拡大させていった従前の教育課程とは、基本的に異なる構想に基づいている。ちなみに従前の課程による高校の地理教育では、まず1年生で週2時間の必修教科「地理」で、天体としての地球、地図、気候、地球の構造と地形の形成、外的営力といった主に自然地理と、国内を7地方に分けて、それぞれの地方をさらに分割した各地区の特色と各地方の経済的特色や観光上の特色を扱うトルコ地誌を学習することになっていた。2年生や3年生では選択教科として「トルコ地理（自然）」「世界地誌」「トルコ人文および経済地理」が設置されており、専門コースによっては必修とされていた。

以下で、新教育課程による5領域の学習目標を概観したい。

1) 「自然のシステム」

9年生では、自然の要素が生活様式に与える影響から自然と人間との関係を意味づけること、自然を構成する4つの基本的要素から自然のシステムが地理のテーマで持つ位置を特定すること、情報の地図化で用いられる手段や技術を利用目的の観点から比較すること、座標システムや地図を構成する要素から時間と場所に関する特性について見出すこと、等高線が描かれた地図で主な地形を区別すること、等高線を地形の基本的な特徴と関連づけること、地球の形態や運動の帰結を様々な気候帯の形成に与える影響の観点から解説すること、気象の形成過程と大気圏の特徴を関連づけること、大気の状態と気候の特色を比較すること、地図やグラフを用いて気候要素の成立とばらつきに影響する要因に関心を持つこと、地図や視覚教材を利用して様々な気候型の特色や分布について見出すこと、世界のプレート成立における変化と持続に論拠を示すこと、地質時代の特色をプレートと関係づけて説明すること、内的営力や外的営力の形成過程を説明すること、内的営力や外的営力を様々な地形の形成作用の観点から分類することが、それぞれ学習の目標となっている。10年生では、岩石の特徴と地表面の形成過程を関連づけること、プレートテクトニクス理論と地震帯や火山の分布を関連づけること、分布図を用いて温泉源を断層線と関連づけること、水源を様々な特徴によって分類すること、土壌の多様性を形成過程に即して説明すること、植生を一般的な特徴によって分類すること、地図、断面図や写真を用いて植生の分布と気候や地形を関連づけることが、それぞれの学習の目標となっている。11年生では、動植物の種類における多様性の成立と種類の減少に影響をもたらす要因を相互関係の枠組みで説明すること、地表水のエコシステム内での位置から自然のシステムの働きにおける影響を分析すること、エコシステムを構成する要素と物質の循環やエネルギーの流れの間における関係に、自然のシステムの働きの観点から関心を持つこと、ある場所の気候データと地形図を関連づけて水力発電の可能性を特定することが、それぞれ学習の目標となっている。12年生では、自然の変遷の最終局面に関する事例を活用して、その形成や自然の変遷に影響を及ぼすものを評価すること、場所の研究を通じて自然の変遷や人文の変遷の間での相互作用を証明する方向で全体的な見方を発展させること、データを活用して、自然のシステムでありそうな変化に関することを見出すことが、それぞれ学習の目標となっている。

必修教科として共通に生徒が学ぶ9年生と10年生の学習内容は、従前の教育課程に対応し、主に自然地理全般についての系統的な学習となっている。選択となる11年生や12年生の内容は、それまでに習得した自然に関する知識・理解をもとに応用するような学習となっている。注目すべきは、そうした学習内容よりも、むしろ「社会科」と同様、地図や視覚教材を生徒が主体的に活用して、自然現象に関心を持ち、それらの意味づけや関連づけをするとともに、事象間の分析をし、因果関係を考察したり説明をしたりすることであろう。高校「地理」においても、方法知の学習に力点が置かれるようになったのである。

2) 「人文のシステム」

9年生では、人間の諸活動から人文のシステムが地理のテーマの中で占める位置を特定すること、居住の状況を特定し、その発展に影響を及ぼす要因を過去から現在までの機能的変遷の視点から分析すること、居住の組織やタイプの成立に効力を持つ要因に関心を持つことが、それぞれ学習の目標となっている。10年生では、人口に関するデータの使用目的における変遷の理由に関心を持ち、人口の重要性について見出すこと、データを活用して世界人口の歴史的推移における変化を解釈すること、人口の特徴に関する図表や地図を利用して人口の分布、動態やその影響力に関心を持つこと、地図や図表を活用して人口の増加率の変化に影響を及ぼす要因に関心を持つこと、人口ピラミッドを作成し人口構成について見出すこと、歴史文書、記録や地図を活用して世界における移住の理由について見出すこと、事例研究を通じ移住の場所的な効果を分析すること、視覚教材を活用して過去から現在までの様々な生活様式を経済活動や社会の変化の観点から分析すること、経済活動を基本的な特色の観

点から第1次、第2次、第3次の活動に区別すること、経済活動の産業別比率の内訳に関するデータを、国の発展水準と関連づけることが、それぞれ学習の目標となっている。11年生では、事例研究を通じて国々の異なる時期についての人口政策を比較すること、歴史的推移において都市の人口と機能的特色についてのデータをグローバルな視点から解釈すること、都市を機能的観点から事例として取り上げ、そのグローバルおよび地域的な影響を解釈すること、自然の構成要素の生産・分配・消費の過程における作用を分析すること、人文の構成要素の生産・分配・消費の過程における効力を分析すること、生産・分配・消費の各部門がそれぞれもたらす影響を、経済活動の種類観点から分析すること、天然資源を分類して天然資源と経済の関係を明らかにすることが、それぞれ学習の目標となっている。12年生では、地図や視覚教材を利用して、初期文化の中心の成立と拡散を特定する要因を時間、継続と変化の観点から評価すること、事例研究を通じて、ある地域で卓越する経済活動の種類、社会的文化的な影響力を議論すること、都市化・移住・工業化の現象を相互の関係の観点から解釈すること、様々なデータを活用して人口・居住・経済活動において将来ありうる変化に関することを見出すことが、それぞれ学習の目標となっている。

この学習領域は、従前の教育課程における「トルコ人文および経済地理」の一部の学習内容に対応するものであり、選択履修の内容を必修化したと判断できる一方で、トルコだけでなく世界的視野での人口学習が展開されている。人口問題は今や世界的な課題であり、トルコだけについて考察すべき題材ではないことが背景にあるからであろう。現代世界のそうした焦眉の課題を「地理」で取り上げたのは、地理教育の目標が国内指向から国際指向に転向した証左と考えられる。選択履修となる11年生や12年生の学習内容は、必修のそれを深化させたものとなっていることは言うまでもない。また、方法知の習得が学習目標に含まれていることは、「自然のシステム」の学習と同様である。

3) 「場所に見る自然と人文の統合：トルコ」

9年生では、地図やグラフを用いて、生活する居住場所の地理的特色について見出すこと、視覚教材や文書資料を活用して、生活する居住空間が異なる時代で示す変化と持続を地理的な視点で分析すること、地図を利用してトルコの地形の基本的特徴や分布を分析すること、トルコの地形形成過程を内的営力や外的営力と関係づけること、地図を利用してトルコの気候に影響を及ぼす因子について見出すこと、気候に関する論拠を活用して、トルコで見られる気候型の特徴について見出すこと、図表や地図を活用してトルコでの気候要素の特徴について見出すことが、それぞれ学習の目標となっている。10年生では、地図上でトルコの土壌型と分布の特徴を関連づけること、トルコの土壌の豊かさが様々な形で用いられることについての事例を活用して、その帰結に関連することを見出すこと、トルコの自然植生をその種類の豊かさや生育条件と関連づけてその分布を分析すること、地図や断面図を活用してトルコ特有の植物の種類や植生を分類すること、トルコの水の豊かさの特色を自然の変遷と関連づけること、トルコの水の豊かさの経済的・社会的・文化的影響力を分析すること、視覚教材を用いてトルコにおける居住と人口分布に影響する要因について見出すこと、トルコにおける居住の単位を機能的特色の観点から区別すること、自然の構成要素からトルコの農村の居住タイプの多様性を例示すること、トルコの都市をその機能によって例示すること、データを活用してトルコの人口構成の特徴のばらつきに関心を持つこと、視覚教材を活用しトルコの人口の歴史的推移に社会経済的な視点から疑問を持つこと、事例研究によってトルコの移住の要因や帰結に変化と持続の観点から関心を持つことが、それぞれ学習の目標となっている。11年生では、歴史に沿って、文明の中心として世界でのトルコの位置を地理的位置の特色の観点から評価すること、視覚教材を活用してトルコの地形と土地利用との関係を分析すること、データを活用して、トルコ経済の部門別構成と経済活動に影響を及ぼす条件を関連づけること、トルコ経済の部門別構成や経済政策を変化や持続の観点から評価すること、トルコにおける農牧業を形成する構成要素を活用して、農牧業活動のトルコ経済における地位を変化と持続の観点から評価すること、利用されている範囲からトルコの原料資源やエネルギー資源

の経済での地位を評価すること、トルコの原料資源やエネルギー資源を効果的な利用の観点から評価すること、データを活用して、トルコにおける工業地域の発展過程を因果関係に重点を置き解説すること、データや地図を活用して、トルコにおける自然災害の分布と発生形態を関連づけること、地域の定義と区分で用いられる指標の観点から、トルコにおける様々な地域の種類を地図上で例示することが、それぞれ学習の目標となっている。12年生では、地域区分の原理とともに、トルコの地理的地域が成立するために必要な要因に関心を持つこと、交通で影響力のある要素とともに、トルコの交通体系の発展を見出すこと、交通網と居住や経済活動を関連づけること、トルコの商業センター、商品やその流れの方向を変化と持続の観点から分析すること、トルコの外国貿易や世界市場での地位を生産物の観点から分析すること、トルコを象徴する場所に関する価値が場所の認識に及ぼす影響を解釈すること、観光活動の環境的・文化的・経済的影響力からトルコの観光政策を分析すること、トルコの人口政策とその必要な理由を評価すること、トルコの人口計画を中心としたシナリオを構成すること、トルコの地域発展計画をその必要な理由や影響力の観点から分析すること、地政学的に影響力がある要因とともに、歴史的過程におけるトルコの地政学的位置を変化と持続の観点から評価すること、トルコの位置的特色とともに、国内の地政学上の諸地域との関係を分析することが、それぞれ学習の目標となっている。

「地理」が必修である9年生や10年生では、既習の学習領域である「自然のシステム」や「人文のシステム」での知識・理解を基盤に、自然環境や人口の観点から全体としてのトルコを扱う国土認識の学習となっている。その点では、7地方に区分してくまなく国内の諸地方を扱う従前の教育課程とは異なるが、学習内容的にはアイデンティティの育成を図った国土認識に目標が向けられていると考えられる。選択履修となる11年生からは、産業経済の視点から国土認識を深めることになっており、選択履修の地理学習は国土認識をさらに補強するような役割を担っている。本領域においても、地図や諸資料を活用する能力の育成など、方法知の習得も学習目標に含まれている。

4) 「地球環境：諸地域と諸国」

9年生では、世界の様々な地域例をその特色や地域区分で用いられる指標の観点から分析すること、様々な規模での地域例を用いて、地域区分が目的によって変化しうることを説明すること、地図を活用して様々な地理的指標で区分された地域に見られる国々を区別することが、それぞれ学習の目標となっている。10年生では、大陸と大洋の位置的重要性を歴史的経緯から事例で評価すること、地域間や国際間の相互作用で技術の発展が果たす役割を例示すること、国際的な交通路線の地域的およびグローバルな影響に関心を持つことが、それぞれ学習の目標となっている。11年生では、文化地域の形成に影響力のある構成要素から、トルコ文化の広がっている範囲について地域的な分析をすること、国家間および地域間の貿易と原料・生産・市場の範囲を関連づけること、事例研究を通じて国際的な相互作用での観光活動の役割に関心を持つこと、事例研究を通じて1か国の地理的特色を追究すること、工業化した国を工業化の段階の観点から分析し、工業化の過程について見出すこと、農業活動の観点から様々な水準にある国々を比較して農業と経済の関係を解説することが、それぞれ学習の目標となっている。12年生では、事例国の分析によって発展段階を規定する要因を見出すこと、ある先進国の地理的特色を追究すること、ある発展途上国の地理的特色を追究し、国により発展が異なる理由を解釈すること、天然資源の潜在力の観点で異なる特色を有する国々を比較して、天然資源がもつ地域的な関係やグローバルな関係への影響力に関心を持つこと、世界の重要なエネルギー輸送網を地域や国家にもたらす影響の観点から分析すること、地理的分析によってある国の位置が持つ地域的およびグローバルな影響力を評価すること、地域的およびグローバルなスケールでの政治的・経済的な組織の成立要件とともに、その組織の機能や影響範囲を変化と持続の観点から評価すること、世界における地域的統合の成立と発展を変化と持続の観点から評価すること、国家間で問題となりうる場所的な要素を今日の紛争地域と関連づけることが、それぞれ学習の目標となっている。

本領域は世界地理学習の範疇にあるが、「地理」が必修である9年生と10年生の学習では、それぞれ世界の地域区分、地域間や国家間の結合が学習内容となっている。いわば世界を概観する段階だけにとどまっていると言えよう。11年生以降の選択学習では、経済的な視点からの国際関係や経済格差、地域的統合や地域紛争について考察させており、必修での学習内容との間に大きな落差がある。従前の教育課程では「世界地誌」で、世界の諸国を通じて本領域に対応する学習がなされていたが、同教科は選択であった。新課程でも具体的な世界地理についての学習は、依然として選択履修に位置づけられている。ただし、世界地理学習の目的は従前の教育課程と新課程とでは大きく異なる。新課程では具体的な国家を地誌として扱うのは事例を通じてであり、世界の諸国を網羅的に取り上げてはいないのである。また、いくつかの国が扱われているが、それは経済格差といった主題を考察させるためである。なお、本領域においても方法知の習得が学習目標の重要な1つとなっていることは、他の領域と同様である。

5)「環境と社会」

9年生では、人間にとって不可欠なものから自然環境の使われ方を例示すること、自然環境が人間の活動に及ぼす影響と人間の自然環境への適応の過程を相互関係の枠組みで分析すること、事例を活用して自然環境において人間の影響で生じる変化の帰結を分析することが、それぞれ学習の目標となっている。10年生では、生活している地域と他の地域における自然災害の発生を、その理由・激しさ・頻度・人間への影響の観点から比較すること、世界の様々な地域で発生する同類の自然災害の影響を、防災の手段や計画の観点から比較すること、自然災害の原因である人間の適応と防災の手だてを関連づけることが、それぞれ学習の目標となっている。11年生では、天然資源の発見や利用に伴う人間活動の変化と持続を歴史的経過から例示すること、天然資源の利用における様々な節約に“場所的な効果”や“環境への感受性”の観点から関心を持つこと、天然資源の価値や利用についての認識の変化を世界の様々な地域からの事例で明らかにすること、国によって天然資源の利用が異なる理由を環境への影響の観点から評価すること、天然資源の活用が人間の活動に与える影響に関する事例を環境計画や環境の変化の観点から解釈すること、事例を活用して“効果的な場所の利用”を適用することの環境上での効果を評価すること、再生不可能な資源の利用可能性に関する様々な事例を、“消耗の可能性”や“代替資源”の概念の枠組みで分析すること、原料資源やエネルギー資源の生産・分配・消費の環境への負荷を例示すること、事例研究を通じて技術の変化を環境への影響の観点から分析すること、様々な廃棄物の種類を環境への影響の観点から評価すること、リサイクル原料に向けての戦略を追究すること、人間活動が炭素・窒素・酸素や水の循環に影響をもたらす事例を挙げることで、グローバルな環境問題の発生における人間活動の影響力に関心を持つこと、環境問題の発生と拡大の過程にグローバルな影響の観点から関心を持つことが、それぞれ学習の目標となっている。12年生では、自然環境の限界性を“食物連鎖”や“運搬能力”の概念にそって説明すること、歴史的過程で自然に適合した発展の観点から環境問題が免れるような適用を評価すること、自然災害に関して様々な適応が十分であるかを評価すること、自然環境の保護に向けてとられる対策や計画が場所に与える影響を評価すること、限られた資源の効果的な利用というテーマでプロジェクトを展開すること、データを活用して天然資源のリスクについて見出すこと、天然資源の管理に関する原理を特定すること、今日の環境問題に関するシナリオを想定できる影響の観点から評価すること、環境の保全や保護の観点から国々を比較して、国際的な実施と環境に関する組織の活動とを評価すること、共有する自然遺産の生態系における重要性とともに、自然遺産に向けられた脅威に関心を持つこと、自然遺産の保護において個人的な責任の必要性を信じることで、それぞれ学習の目標となっている。

9年生では地人相関論の基本的な考え方を確認し、10年生で自然災害について具体的に考察させている。したがって、必修としての地理学習としては、自然環境の持つ重要性に力点が置かれた学習が想定されている。人間社会が自然環境とどのように向き合うべきかについては11学年の天然資源の

活用についての学習に負っているが、11年生での学習は選択の範疇におかれているとおりである。また12年生の学習についても、自然環境が人間活動にもたらす制約を中心に展開されている。したがって、本領域についての地理教育の基本的な立場は、自然環境の重視、さらに言えば環境決定論的な視点に立っていると解釈できる。拙稿（1997, p. 170）で指摘しているように、従前の高校地理教育の傾向として自然環境の重視があったが、そうした傾向を新教育課程の学習においても引き継いでいると判断できる。しかし従前の教育課程では、地人相関論自体を単元ないし領域として大々的に扱っておらず、地人相関論を1つの領域として前面に押し出している点は、新課程の注目すべき特色と言えよう。なお、本領域においても方法知の習得が学習目標の主要な1つとなっていることは、他の領域と同様である。

4. 新教育課程による地理教育の課題

以下では、まず新教育課程による初等教育学校や高校で行われる地理教育の動向を学習内容と学習方法の観点から整理し、そうした動向に対応する実践上の課題を考察することにしたい。

4-1 学習内容の観点から

初等教育学校では「社会科」の中で地理教育が展開されており、「社会科」の目標にそった形で地理学習が行われる。子どもの住む地方についての学習や、異文化理解と経済的結びつきの視点からの国際理解もなされるが、主に自然環境や人口、産業からの国土認識が地理学習の中心的な学習内容となっているとおりである。それに対して高校の「地理」では、主に「自然のシステム」での自然地理学習、「人文のシステム」での世界的視野からの人口学習、「場所に見る自然と人文の統合：トルコ」での自然環境や人口などの視点からの国土認識、「地球環境：諸地域と諸国」での地域間や国家間の結合からの世界の概観、さらには経済格差や地域紛争などの現代世界の課題、「環境と社会」での地人相関論と自然災害の学習となっている。つまり「自然のシステム」と「人文のシステム」を通じて自然環境と人口について系統的に学習し、それを基盤に「場所に見る自然と人文の統合：トルコ」でトルコの国土認識を育む。さらに国家を視点に「地球環境：諸地域と諸国」で世界に視野を拡げて、「環境と社会」で世界のかかえる環境問題について追究する構成となっている。高校では自然環境の認識と国土認識、人口問題などの現代世界の課題が中心的な学習内容となっているとおりである。こうしてみると、初等教育学校や高校で行われている地理教育の内容知の目標としては国土認識とともに、現代世界のかかえる課題や国際理解からの世界認識と自然環境の認識に置かれていると総括できる。

国土認識の学習は、従前の教育課程では「社会科」においても「地理」においても国内を7地方に区分して、それぞれの地方をすべて取り上げた地誌学習が展開されてきた。しかし、新課程では国土全体からトルコを取り上げることはあっても、地方別には扱っていない。国土認識の目的が国民としてのアイデンティティの育成にあることを念頭に置くと、国土全体からだけでなく地方別の地誌学習がなされてこそ、他の国民が生活する地域について通曉し、国土に対する認識が深まるはずである。新課程でも国土認識が主たる目標の1つとなっているにもかかわらず、地方別の地誌学習が初等教育学校と高等学校の双方で欠落している状況は、アイデンティティの育成の観点から議論が起ころえよう⁵⁾。もっとも、国土認識による国民としてのアイデンティティの育成が、さらには国民としてのアイデンティティの育成自体が、以前ほど重視されなくなったとも解釈できる。実際に、刷新された「社会科」教育の目標に公民的資質の育成があるが、国民としてのアイデンティティだけでなく、社会科学的な見方などを身に付けて民主主義社会に参画できることが、公民的資質として謳われている（拙稿，2006, p.89）。

新教育課程では見方や考え方と調べ方が重視されているだけに、子どもたちの住む地方の特徴について学習する単元での学びを事例学習とし、他の地方についてはそれを応用するという教育観に立つと、全地方を取り上げる諸地域学習を展開しないという考え方もありうる。そうした考え方を外国の学習についても適応することが可能である。事実、新しい教育課程では「社会科」で異文化理解による国際理解として

5か国、経済的結びつきの視点からの国際理解として5か国が、それぞれ事例としてあげられているとおりで、事例的な外国地理学習が展開されている。教科書で例示されている合計10か国の地域別内訳は、ヨーロッパが2か国、北アフリカが2か国、東アジアが2か国、中央アジアが2か国、オセアニアとラテンアメリカがそれぞれ1か国ずつである。国際理解の目的をどのように考えるかによっても異なるが、多様な文化や経済格差をかかえている現代世界を概観するためには、取り上げられている地域のほかに、中南アフリカやアメリカ合衆国、南アジアなども欠かせないであろう。確かに従前の教育課程では、高校の選択による「世界地誌」の学習は別にすると、初等教育学校での必修教科「社会科」で、主として隣国とトルコ系諸国についての地誌学習が展開され、外国地理学習の目標が周辺諸国と同胞の国々についての理解であると特定されていた。新教育課程では事例国を通じての外国地理学習を採用しているだけに、どの事例国を取り上げるのかは、国際理解の目標との関連で検討する余地が残されている⁶⁾。

4-2 学習方法の観点から

新課程においては初等教育学校での「社会科」でも高校での「地理」でも、データの利用活用と分析や科学的な追究過程などを通じて知識を自ら獲得し、それを活用できる能力の育成が学習の目標とされているとおりである。方法知の習得を視野に、子どもの主体的な学習が学習方法として重視されるようになったのである。旧来の教育課程では教師が知識を教授し、子どもはそれを暗記するだけであったと言っても、過言ではなかった。それだけに、新教育課程では学習方法の大転換がはかられたわけで、新課程の実施にあたってはいくつかの課題が考えられる。その点について「社会科」に関して拙稿(2006)で言及しているので、本稿では概略的に確認するだけにとどめておきたい。

まず1つは、教師の指導力についてである。新教育課程の教育理念を実現するためには教師教育が必要になるが、それがどれほど可能なものなのかという懸念が残る。初等教育の後期段階での「社会科」を始めとする社会系教科を担える教員は養成されるようになったが、多くの現場の教師は新たな教育観への対応で困惑しているものと推察される。とりわけ、高校については大学で地理学を専門に学んできた教師が担当しているため、教育学についての関心が高いとは考えられないので、一層実現には困難が伴うであろう。日本でも中学校や高校では、近年になってやっと学習指導についての配慮がなされるようになったように、教育観の転換を実現するためには長期間を要することになるだろう。新課程では子どもの主体的な学習を推進する観点から、初等教育学校では子どもたちに教科書とともに対応する作業帳が無償で配布されることになったが、そうした教師の状況を考慮すると、それらをどのように活用して授業を展開できるのかが示されるべきであり、実際に、教科書や作業帳のねらいを解説し、単元の展開に必要な教材・教具、学習指導過程の事例を示した教師用指導書が作成された。そうした指導書がどれだけうまく活用されるのかが、新課程での展開の鍵となるであろう。

他の1つは、学力の評価についてである。授業での評価については、子どもの自己評価やポートフォリオを用いたりした観点別の評価表が考案されており、それに基づいた学力の評価が可能である。問題は入学試験であろう。トルコでも進学率が上昇し、高校入試となるOKSの出題内容が衆目を集めるとおりである。OKSはマークシート方式による出題であり、グラフの読み取りや見方・考え方を問うような出題も見られるが、基本的には知識・理解を問う内容となっている⁷⁾。したがって、「社会科」の学習を通じて獲得される知識・理解以外の能力をOKSで問うことは容易でない⁸⁾。全国統一の大学入試(トルコ語の略称でÖSS)についても、OKSの出題と同様マークシート方式が採用されており、初等教育学校の「社会科」よりも一層詳細な学習内容を扱う高校の「地理」については、知識・理解以外の能力を問うことはなおさら困難である。進学率の上昇に伴い、高校入試や大学入試に左右されざるをえない教育現場を想起すると、日本における中等教育の実態と類似した状況が、トルコにおいても発生することが予想される。

5. 終わりに

本稿では、トルコにおける新教育課程の「社会科」と「地理」の教育目標などから、地理教育の動向を

中心に考察した。その結果、次のような結論を導くことができた。すなわち、従前の教育課程と大きく異なり、方法知の習得が学習目標として前面に押し出されるようになった。内容知については、アイデンティティの育成を図るための国土認識が、地理教育の目標の1つとなっているものの、従前の教育課程と比較すると重視されなくなっている。それに代わり、現代世界の課題や国際理解からの世界認識が強調されるようになってきている。特に「地理」では従前の教育課程と同様、環境問題への対応から、自然環境の認識が目標の1つとして重視されている。概略的に総括すると、地理教育の目標は、自然環境に対する子どもの認識形成を前提に、中核となってきた国民としてのアイデンティティの育成だけでなく、国際社会の一員としてのアイデンティティの育成も重視され、目標自体が多極化していると言えよう。

分析にあたり、「社会科」については教科書や作業帳、教師用指導書が入手できたので、教育目標具体化の実態をある程度把握することができた。しかし、「地理」については教科書が入手できず、刊行物や国民教育省のホームページによる解説や大学入試の参考書に依存せざるをえなかった。「地理」についても教科書等の分析をし、具体化の実態をより深く解明しなければならないであろう。さらに、授業の現場についても観察する必要があるだろう。かつて筆者が学校視察をした際は、伝統的な問答式の地理授業が展開されていた。新たな学力観に基づく授業がどの程度定着しているのか、その実態も調査しなければならないであろう。とりわけ、地理教育の目標として方法知も重視されるようになっただけに、子どもの主体的な学習が保障されなければならず、当然のことながら、学習活動の実態については明らかにされなければならないであろう。

注

- 1) 外国語学習に力点を置くアナトリア高校では、1年間の予備課程があるので、実質5年が修学年限となっている。
- 2) ここで用いる“地方”とは、日本を7地方に区分したときの関東地方のような地方を指し、トルコでは国土が通例、黒海地方、マルマラ海地方、エーゲ海地方、地中海地方、南東アナトリア地方、東アナトリア地方、内アナトリア（中央アナトリア）地方の7地方に区分される。
- 3) 日本のような新興勢力との関係促進を望んでいたオスマン帝国は、日本への答礼使節団を組織した。使節団は1890年6月に無事日本に到着したが、使節団を載せたエルトゥールル号は、帰途紀伊半島の南端にある大島付近で高波と暴雨風雨のため遭難した(同年9月)。この事故で580名ほどの死者が出たが、島民が献身的な救難活動をするとともに、犠牲者救済のための義捐金募集も始められた。遭難現場近くには慰霊碑とともに、遭難関連の資料を展示するトルコ記念館が設立されている。
- 4) GAPは、ユーフラテス川・ティグリス川の上流域における灌漑化による農業開発と電源開発を目的に、1976年に国家事業として作成された。アタテュルク＝ダムなどの大規模なダムが建設され、計画対象地域における農業生産が急増している。GAPの詳細な概要とその意義やねらいについては、拙著(1999b)を参照されたい。
- 5) 日本の中学校社会科地理的分野では、平成元年版学習指導要領までは日本の国内を地域区分した諸地域学習が行われていたが、平成10年版学習指導要領ではそうした諸地域学習を撤廃してしまった。しかし、平成20年版学習指導要領では日本の諸地域学習が復活した。20年版用の文部科学省『中学校学習指導要領解説社会編』における「各分野の改訂の要点」によると、「地域的特色を動的にとらえさせる」(p.12) ことが諸地域学習を復活させた理由としてあげているが、それだけの理由であるならば、区分されたすべての地域を取り上げる必要はなく、いくつかの地域を事例的に取り上げるだけでもよいことになる。地理的分野の目標となる「我が国の国土の地域的特色を考察し理解させ、・・・(中略)・・・我が国の国土に対する認識を養う。」という10年版の文言が、ほぼそのまま20年版にも適用されているだけに、国土認識にあたっては地域区分に基づく諸地域学習が不可欠であると、判断されたものと推察され

る。

- 6) 日本の諸地域学習と同様、世界の諸地域学習についても同じような経緯をたどっている。平成10年版中学校学習指導要領では事例学習が採用されて、2つないし3つの国だけしか学習されなくなり、従前の学習指導要領まで継続した世界の諸地域に関する学習が撤廃された。しかし、平成20年版では、世界の諸地域についても地域的特色を理解し地理的認識を養うことが目標として取り入れられて、6大州それぞれの地域的特色が学習されることになり、世界の諸地域学習が復活した。
- 7) OKSで出題された入試問題例については拙稿(2006, p.91)参照。
- 8) 2007年のOKSから入試制度の改善が図られ、初等教育学校の成績がOKSでの得点に加算されるようになった。OKSで出題される問題だけでは、方法知を重視した新しい教育課程に対応した学力が測定できないと、判断されたものと推察される。

引用文献

- 拙稿(1996):「トルコにおける近年の地理教育の動向(1)－中学校・高等学校の教科書を手がかりに－」『横浜国立大学教育紀要』第36集, pp.43-60.
- 拙稿(1997):「トルコにおける近年の地理教育の動向(2)－中学校・高等学校の教科書を手がかりに－」『横浜国立大学教育紀要』第37集, pp.153-172.
- 拙稿(1999a):「トルコにおける社会系教科の現状」『社会科教育研究(別冊・1997年度研究年報)』pp.59-61.
- 拙著(1999b):『トルコの見方－国際理解としての地誌－』二宮書店, 220p.
- 拙稿(2006):「トルコにおける社会科教育の動向と課題－教科「社会科」を手がかりに－」『社会科教育研究』第98号, pp.84-92.

参考文献およびウェブページ

- Milli Eğitim Bakanl•ğ• (2006): *Coğrafya Dersi Öğretim Program• (2005 Program•)*. Gazi Kitabevi, Ankara, 290p.
- トルコ共和国国民教育省初等教育局<http://iogm.meb.gov.tr/>
- トルコ共和国国民教育省中等教育局<http://ogm.meb.gov.tr/>